

木曾地域の高校の将来像を語り合う会 会議録（発言要旨）

令和元年8月29日（木） 午後2時00分

木曾文化交流センター 大会議室

出席者

産業界関係者（商工会、製造業、農協、森林組合等）9名

- 1 開会
- 2 自己紹介
- 3 日程及びねらい

○事務局

1【目的】

木曾地域の高校の将来像を考えるにあたり、様々な考え方や経験を有する住民、各種団体などから意見をお聴きし、内容を木曾地域の高校の将来像を考える協議会委員にフィードバックすることで協議会における議論に活かすことを目的に実施します。

2【ねらい】

○高校改革の理解度を高めていただくとともに、自分なりに考える高校の将来像を語っていただきます。その中で、他の方の考える高校の将来像を聞いていただくことで、参加者相互の理解を深まればと考えています。

○「語り合う会」（意見聴取）の発言内容をまとめ、協議会に報告させていただきます。

3【約束（お願い）】

○話す時間をお守りください。皆さんの意見をお聴きしたいので、意見聴取は3分。意見交換の1回の発言は2分以内でお願いします。

○人の話すことを否定しない。いろいろな意見があり、相互に信頼しあうことが大事であると考えます。

○人の話を聞き、自分の意見を変えてもいい。答えは一つではありません。共感することで最適解に向かうと考えます。

4 高校改革～夢に挑戦する学び～ 県教委から説明

○県教育委員会

この高校改革はなぜ今かということになりますけれども、その背景としましては、

社会の激しい変化、AIの科学技術、情報技術というようなことへの対応が必要だろうということと、もう1つがこれも切実な問題としまして少子化への対応と、この2つが一番の背景となっておりまして、改革を今進めていると。いわゆる第2期高校再編ということになっております。

高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針というのは、6本の方針、柱で成り立っております。先ほど背景として申しました社会の大きな変化に対応するための新たな学びの推進ということで、方針1、全ての高校がこれからの時代に必要とされる力を生徒に育む新たな学びを展開します。2、夢に挑戦できる多様な学びの場、学びの仕組みを整備充実します。3、新たな学びにふさわしい環境を整備しますというようなことで、言ってみればソフト面の部分がこの新たな学びの推進ということになります。

少子化への対応ということで、再編整備計画ということですが、さらなる少子化の進行に的確に対応します。多様な学びを全県に適切に配置します。6が先ほどお話がありました地域協議会を開催しますというようなことになっております。このような6つの方針で今行っているということになります。

この木曾地区は第10通学区ということになりますが、ページ数でいきますと50ページのところに木曾地区の第1期長野県高校再編計画のときの内容、現状、課題。52ページをめぐっていただきますと、再編計画の方向性というような形で書かせていただいております。

資料3は、木曾地区の第10区のものを取り出したものでございます。わかりやすいように棒グラフで2033年までの子供たち、この地区の中学校卒業予定者数の予測ということでまとめさせていただいております。

2017年、これは今はもう高校に入っている子たちですけれども、210名おりました。それが2033年には、この木曾地区では117名になるというようなことで、2017年と比較しまして約90名、56%減というような状況になります。約90人減少するということは、1クラス40人学級で計算しておりますので、2クラスが減少すると、そういうような状況になります。

先ほど言いましたように、これから子供たちが生きていく時代ということになります。グローバル化の加速、少子超高齢化社会、AI・ロボットの発達、高度情報化社会・超スマート社会、変化の激しい時代というようなのが、また正解のない時代、何が正解なのか何が正しいのかという白黒つけることがなかなか難しいような時代になってくるという中で、このような社会に対して知識を蓄えることも大切だ

が、それだけでは不十分と。課題を発見する力や、自ら考え判断し行動する力、他者と協働して納得解にたどり着く力など、新たな社会を創造する力が必要不可欠というような形でまとめさせていただいています。

そのためには、これからの学校教育、高校教育が行うべきことといたしまして、育てたい力の明確化と育成、これは新たな時代の学力観に基づきます。そのための新しい学びと多様な学びの場と多様な学びの仕組みの創造が必要であろうというように考えております。

新しい学びの創造ということで、これはどういうことかといいますと、探究的な学びの導入、これが今現在、義務でもそうかもしれませんが、高校では1つのキーワードとなっております。探究的な学び。これは言ってみれば主体的、対話的で深い学びというように言い換えることができるかと思えます。生徒自身が考え、他者と話し合いながら学びを深めていく。そのために課題探究活動の導入ということで、自分たちでテーマ、問いを設定しまして、調査研究する。それに対する解決策や成果物を提示する、発表する。

さらに授業におきましても、今までの一方的な講義、私たちもそうかもしれませんが、先生が板書するものをノートに書き写すというような一方的な授業ではなく、自立的、主体的な学びと協同的な学びということで、こんなように学校によっては、みんなで机を合わせながら、話し合いながら協同学習をします。

これがまとめたものになるかと思えますけれども、知識・技能を応用して探究的な学びをする。その中で思考力・判断力・表現力等の能力を向上させて、学習意欲を高めるというような形で、主体性、多様性、協働性の向上を目指すというようなものになります。

多様な学びの創造ということですが、これはさまざまなタイプの学校の設置ということで、これまでは普通科、専門学科（農工商家）、特色学科（理数・英語・国際）青峰高校にございますけれども、総合学科、これは蘇南高校が総合学科ですね。総合技術高校、定時制、多部・単位制、通信制、特別支援学校の分教室というような学びの科がございましたが、これからはさらに総合学科、総合技術高を充実拡大していく。多部・単位制高校の充実拡大、通信制の改革。さらには普通科を含め全ての高校の特色化、魅力化ということで、先ほど言いました3つのポリシー、3つの方針もこういうような形でまとめているということになります。

最後のまとめということで、これからは生徒個々が自分のペースで行う、生徒主体の学び。そのためにそこに書いてあると思えますけれども、我々教員の役割は、

ティーチャーからファシリテーター、いわゆる調整促進者、伴走者というような立場、意識が必要ではないかと。

我々大人の一番の役割として書きましたのが、次代に生き、次代を担う子供たちがこれからの時代に生きる力、新たな社会をつくっていく力を身につけられるような環境を整備すること、これがこれからの我々大人たちの使命ではないかということで、今回の高校改革の目的の一番の根底にあるのは、この考えでございます。

5 高校の状況について 木曾青峰高等学校、蘇南高等学校からの説明

○木曾青峰高等学校 木曾青峰高校お願いします。A4の資料です。本校は全日制に4科、普通科、理数科、森林環境、インテリア科。それと定時制に普通科が1科あります。それぞれ各クラス40人募集で全日制が4クラス、定時制1クラスの学校です。

2番にありますように、各科とも今年度の入学生は定員を割っております。表1にありますように普通科が34名、理数科は27名、森林環境が34名、インテリア科30名です。前年度ですと理数科、それからインテリア科は40名。過去を見ますと40名を超えている募集もありますが、その年によって変わるというような形の流れも見てとれるかと思えます。

今後に向けてということで、課題克服のため、3番ですが、先ほども話がありましたが県の教育委員会のモデル校というものに応募しまして、高度な産業教育を推進する高校の研究校という形で今年指定を受けました。そのためにいろいろ学校長を中心に地元の産業界の皆様、それから上松技専、長野県立林業大学校等の職業学校の皆様ともいろいろ話をさせていただき、いろいろ調べれば調べるほど、木曾の地にいろんな産業であったりとか、またこれから生徒たちと一緒に学んでいける素材がいっぱいあるんだなということが逆に発見できました。

それを実はこの8月30日に中間まとめ報告という形で何とか仕上げまして、県に送ります。それを受けて、本年度1月ですが、今後、来年度から進んでよいかどうかというような判断をいただくという形になっております。今回の作成に当たっては、地元の皆様に多大な御協力をいただき、中間報告を作成することができましたので、御礼申し上げます。

最後に表の1と表2ですが、本校の様子ですとかをごらんください。以上です。

○蘇南高等学校 それでは、蘇南高校からお願いいたします。本校の沿革、流れについては、もう地元の皆様に細かく説明する必要はないかと思えます。1、2をざっと見ていただければと思います。もともとゼロから作った学校ですので、一番長

かったのは普通科、商業科、電気科の三科、これを併設していた昭和38年から昭和60年までこの体制が蘇南高校が一番長かったんですが、少子化への対応ということで普通科の学級減による学級編制をしてきた。そして平成21年には2学級規模にしなければならないというところで、総合学科がスタートということになります。

総合学科に転換してからの入学生ですが、2学級80人募集でございますが、今年で11期生まで入ってきましたが、その合計のところを見ていただくとわかるとおり、80人を満たしたことは一度もありません。というのは、総合学科がどうのこうのではなくて、もう既に普・商・電で3学級の時代から120人というものを割り込んでおまして、大体120人募集のところから70名から上くらいの、そんな入学生であったものですから、総合学科になってからがくっと下がったということではありません。

ただし、平成24、25、26年のあたりを見ていただきますと、全校生徒数が160人を割り込んで、第1期再編の再編基準にひっかかりそうなそういう危機もありまして、存続の危機ということもありますが、現在では160という数字からは幾分遠のいた数字になるということです。

総合学科というものが非常にわかりづらいということなんですが、4番のところに文部科学省のホームページから引っ張ってきたものがあります。その中でも特徴的なものは、自分で科目を選択するということ、そして主体的な学習を重視すること、さらに自己の進路への自覚を深めさせる学習、キャリア教育ですね。こういったものに重点を置いた、そういう教育活動を行ってきております。

本校の特色、課題を含むという最後の部分でございますが、小規模校、そして定員割れしているというのを逆手にとって少人数教育を行っていると。その中でキャリア教育や主体的・対話的深い学びというものがかなり進められているのかなと。これは総合学科の特徴ではあるんですけども、総合学科とともにこういう動きで来ておりますので、そういった点では現在も新しい学びに対してアドバンテージがあるのかなと、そんなふうに思っております。

ただ、一番下にも書きましたように、やはりスケールメリット、これを生かした活動という点では非常に苦しい部分もあります。特に部活動に関しては、かつて全国大会で常連であったような陸上部はもうありませんし、そういう意味では生徒の自主的な活動が制限されてしまうという部分では苦しい部分があります。

○出席者 蘇南高校の人数の中で、蘇南高校は岐阜県境にあり、県外からの入学者

があると思う。蘇南高校の県外、郡外の数字はわかりますか。

- 蘇南高等学校 県外から入学した本年度1年生は16名で、隣接県協定で認められた中津川市立中学校の出身者です。郡外は主にバドミントン部に入部している生徒で、今年は4名です。

6 意見聴取

- 出席者 今は職業科、いろんな学科があって多種多様な選ぶことができるということは非常にありがたいと思うが、それを中学生のうちに子供たちに選択をさせなければいけないという部分というのも一理あるのではないかなと思う。普通科、理数科、インテリア科、総合学科、もう少しいろんなことをチョイスできるようなことが普通科等にあれば、非常にありがたいのではないかなと思う。高校の3年間で、自分の方向性をしっかり決められるということが非常に重要であって、学科を選ぶということをしなければいけない今の中学生たちというのがかわいそうではないのかなとも思っております。

高校というものが地域になれば、将来を担うべき力というものが全て外に出てしまうということがあるので、高校はやはり残してほしいというのを大前提として、今後の高校の方針につけ加えていただければと思う。

- 出席者 多様性からいけば、高校はそのままあったほうが一番いいと思う。私は木曾高校で生徒会長をやった。なのに、高校に余りいいイメージが残ってなくて、うちの子供は2人とも松本まで通わせた。高校でいろんな人がまじってしまうと、いいほうにいいほうに切磋琢磨されていけばいいけれども、割と高校生ってそのようにいかない年ごろだと思う。総合的なところに行くと流されてしまうので、流されないところに子供たちを進めて行く方向というのがあればいいと思う。

この後、統合合併すると、上松から須原に学校を1校建てるぐらいの、そういう気持ちで新しい学校をつくっていかないと、その新しい学校にいろんなコースがあるというイメージにしていけば、残っている子供たちが新しい学校をつくっていくという、先ほど説明があったような学校ができればいいと思う。

- 出席者 これからも少子化になっていきます。これが一番の問題で、多分木曾は1校という、そういう可能性が非常に強いのではないかという感じはするんですが、できる限り少人数でもいいから、今の現状のまま行ってもらえれば、それが一番いいのではないかと思う。平成16年頃は、木曾高校も非常にレベルというか、東大、京大をはじめ、理数科を合わせて32人くらい国公立に入ったときだった。

将来の中で、今の理数科は人数は多少少ないですが、こういった子供たちでも結

構能力が伸ばせる理数科と普通科と専門科ですね、その3科を残した中で将来はそんな形でいかなければ仕方ないのではという感じがする。蘇南高校には総合学科という考え方もあるので、その辺は吟味した中でやっていけばいいと思う。

○出席者 企業としては、地元の高校を出た方を採用するという事は非常にこの地域の活性化になっていくと思う。企業人としては、高校生、そういった新しい専門学校を出た方を本当に優先的に採用させていただいているので、今後も積極的に高校と親身になって採用をしていきたいと考えている。木曾郡内には金属加工の会社があるので、機械科を作ってほしいと以前話したことがあるが、納得されず残念だった。

今度は青峰のほうで高度な産業教育を推進する高校と書かれている。そういった形で本当にここにいる建設業、商工会の方もいますが、地元企業に根づいた科も検討していただければ、卒業生も地元に残って地域貢献をしてもらうことができるんだろうと思う。

私たちの社員の中でもお子さんがやはり塩尻の高校に通ってしまうということで、地元を離れてしまうということもある。魅力ある会社には人が集まってくると言われるので、高校としても県教育委員会のほうもそうだと思うが、魅力ある高校づくりをしてほしい。

○出席者 県の方針の説明を受けたが、すばらしい方針が出ていて、そのままやっていただければと思う。

建設業界で一番の問題は、建設業の中での技術の継承ができないという、若手がいなくて、いろんな技術の継承ができないということ。青峰高校は専門学科とタイアップして測量もやったり、研磨機の実習をしたり、講習会をやったりということで年4回くらい、建設業に目を向けてもらっているというのが今現在。青峰高校が地元なので、本当にこれから重要な高校ということで、これからは高校へ出向いてでもいいので、我々の専門知識を授業の中で講師を招いて講義をやってもいいかなと考えている。

木曾青峰高校の場合は、特色のある学科を持っているので、そこを生かしていただいて、それを生かして、よそから連れてくるような施策をすれば、少子化による再編もなくともいいのでは。そういうのをぜひ考えてもらいたい。

○出席者 先ほど説明にあった高校の教育に関する方針はすばらしいと思う。特に私たちが高校のときは知識の部分ばかりだったんですけど、主体性とか多様性とか協働性とか、そういう自分で判断することができなかった。うちの組織も職員にそ

ういう部分が欠けているところはある。地域の産業界では、新たな教育を受けてきた子たちが木曾に戻ってきたとき受け入れられる環境づくりを、組織もやっていかなければいけないと強く思った。

将来的にはどうしても統合されてしまう部分が強く考えられるので、今から普通に統合とかではなくて、蘇南、青峰と全然学校が違うよという色も薄くして、お互いに交流をもっと多くやっていければ、将来的にはスムーズに統合のほうに行けると思う。まだ時間が10年、20年とあるので、まだ高校に行かない子たちも、蘇南へ行っても青峰に行ってもどっちもいいなというふうに考えられるような方向にしていければ、統合に関してはスムーズに行くのではないかなということは、個人的には考えている。

○出席者 どのような時代になっても、地域には高校は必要です。学びの場としてはもとより、地元出身の高校生が何か活躍するとより身近になって、地域で元気をもっている。

林業に就職を望み活躍したい人材はいつでも歓迎します。本人志望もあるので、若い方の多くが木曾谷に残るとは限らないが、地元に残りたい人がいれば、万難を排して応援する。

木曾の高校が残るように、特色ある各科が残ることを強く望んでいる。

○出席者 将来的に少子化だから統合やむを得ないというふうな話だが、2つの高校をそのまま存続してほしいと保護者として思っている。収入が少なくて青峰への定期代すら親としてはちゅうちょするところがある。誰でも高校には今の時代進学するので、高校に行ってから将来を考えるということでもいいと思うので、地元にはぜひ残してほしい。

民間企業ではないので、効率を考えるのではなく、教育に対する費用をぜひけられないでほしい。これだけ山、森に囲まれたところなので、そういう学べる環境も必要だと思うので、今のような森林のほうの学科も残してほしいというのも企業としてはお願いしたい。

○出席者 木曾郡は大変広くて、南木曾町内でも一番奥のほうから来ると、バスに乗っても駅に出るまで40分程度かかる。そこから福島まで行くとなると、また小一時間かかるということで親の負担が多いし、また高等教育の機会の均等ということからも、へんぴな地域だけがすごく苦勞するというのは、とても問題があると思う。

また、木曾郡の中において高校が2つないと、学校を選ぶということができない

ということ。松本に住んでいれば、学校を何校も選ぶことができる。岐阜県でもいいのではという、そうなるとう山口村のような話が将来出てきて、南木曾町も結局長野県が解けていく状態をつくる可能性がある。高校とか教育って大事なので、長野県を守るというか、地域を守るという、そういう面でも防波堤として絶対高校は2校残してほしいと思う。

蘇南高校で今の科目は別にいいですが、英語に特化した教育というか、せっかく妻籠宿にいっぱい外国の方が見えるし、南木曾駅にもいっぱいいる。そういう方たちとうまくコミュニケーションをとりながら、何かそういう特色ある、同じ総合学科でもほかのところとは違うぞというカラーを出せるといいなと思う。

○欠席者（代読） 蘇南高校は総合学科となっているが、以前より職業学科もあり、多くの学生を就職、あっせんしてきている実績がある。木曾青峰高校は木曾山林高校との統合はあったものの、進学校としての特徴が多いと思う。産業界としては新たな就業者の確保は不可欠なことであり、近年の労働者不足等を見ても郡内の人口確保の面でも重要であることから、両校の統合には賛成とは言えない。

7 意見交換

○出席者 質問ですが、高校を存続するためには、2学級ないとだめだというそんな話を聞いたんですが、1学級だとその高校は存続することはできないと、そんな話だったんですが。

2学級にしても少人数で例えば30人とか11人とか、そういう形でいけば人数が多少少なくとも、そういう可能性はあるんですが、今のところは最低でも40人というそんな感じで、その辺をお聞きしたい。

○県教育委員会 再編に関する基準などについてということで、61ページにございます。基本的には1クラス40人ということで考えてやっておりますので、それを見ていただきますと、募集定員40人でも単独で高校が存続する道も探るといような形になっておりますので、これについては、第1期の場合には中山間地存立校の規定はございませんでしたが、今回はさらにその下の基準を設けていると。それを下回っても、こういう基準であればというような形になっておりますので、これをお読みいただければわかるかと思えます。

○出席者 2校の必要性というものは非常に感じている中であるが、その中で全県的にも多分高校生の数というのは非常に減ってくる状態になってくると思う。都市部の高校というのも多分学級が減ってくる部分というのものもあるのではないかと推測する。都市部の高校の学級数を減らして、こちらの高校の学級数を存続させるという

ような方向性というのも、今後、県として考えていってほしいと思う。

交通手段だとか、今こちらの学生が松本だとか塩尻だとかにも通っている部分というのもあるが、そういう部分の交通費の補助だとか、逆に言うと都市部からこちらのほうへ来るような。

青峰へは今年14人ですか、県内、郡内から来られている方がいるということですが、そういう部分の数も増やしていけるような高校の魅力という部分をつくっていただくということも必要だと思っている。

○出席者 森林環境科はすごく薄くなる学科だと思うので、それを全面的に出していただいて、例えば募集を白馬高校みたいに日本中から集めるというのでも可能なのか。できればそんな形で。そんなことも視野に入れて、要は山に関して、木に関して興味のある人を引っ張ってくるような施策を。

○出席者 また統合に関する問題になってしまって、偏るかもしれませんが。大事だと思うのは、蘇南高校はもちろんあったほうがいいし、継続のための運動をいろいろするのはいいですが、例えばずっと反対して、最後に消費税10%を反対しているのと一緒に、もしなかったとしたときに解けてしまうのが怖い。

例えば工業科をつくると。新しく科を1個つくると、そういう学校づくりみたいなものが非常にできればいいなと思う。高校のビジョンをつくっていく中で、やっぱり再編というものが避けては通れないなということを感じている。

○出席者 企業ではそれぞれそれに合った、その人に合った指導をしながら育てていくというのが企業だと思うし、ただ、高校としては、とにかく魅力ある高校にしてもらって、できるだけ多くの地元の生徒から始まって、松本へ行かなくても木曾の木曾青峰高校からも信大の医学部に入る生徒もいるし、とにかく魅力ある高校でいけばと思う。

○出席者 生徒数の数値を並べられると、減少ばかり目につき、統廃合の話題のみが先行する恐れがある。高校のあり方は、木曾地域の将来のあり方とも大きく関わってくるので、できるだけ地域の声を多く集め、論議を深めてほしい。

○出席者 地域とのつながりという部分は非常に重要になってくるんだと思う。私たちは商工会という立場で話はさせていただきますが、商いがやっていけないということでやめていく店が非常に多いというのが危惧されている。地域とのつながりを持った高校生たちが、これからどうやってこの町とか村を少しでもよくできるようにということ考えてくれるような、方向性を持った活動ということにもっと焦点を当てていけば、また変わってくるのではないかと思う。

8 閉会